
風に散る花

遊佐一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風に散る花

【Nコード】

N7880A

【作者名】

遊佐一二三

【あらすじ】

ママはわたしを殴らなくてもいいように、わたしはいい子にならなきゃいけない。わたしはママが大好きだから。ママはわたしがどうしたら、喜んでくれるんだろう？大好きなママに愛されたい女の子の物語。

（前書き）

すべての子供が、母親に愛されて幸せに過ごせますように。

初めて「わたし」というものに気づいた時、
わたしは箱の中にいた。

ぼろぼろのダンボール箱がわたしの家。
その頃の「わたし」には名前がない。

部屋の中が明るくなって、暗くなる。

それがわたしの一日。

お腹はずっと減っていた。

時々「ママ」が箱に投げ込んでくれるパンやお菓子が、
わたしのわずかなエサだった。

箱から出るとママが怒るので、

わたしはずっと、狭い箱の中でじっとしている。

「パパ」といわれる人が何度か変わり、

なつかないとママにしかられるので、

わたしは一生懸命、パパを好きになろうとした。

ママは好き。

どうして好きなのかわからないけど、わたしはママを好き。

ママにわたしを好きになってもらいたいと思う。

でも、わたしがちっともいい子じゃないので、

なかなかママに好きになってもらえない。

わたしはもっとがんばって、いい子にならなきゃと思う。

明るいのと暗いのを何度も何度も繰り返した、何回目かの暗い時に、
わたしは熱いお湯をかけられた。

たぶん、わたしが悪い子だったからだと思う。

熱くて熱くて、いっぱい泣いてしまったので、何人目かのパパにたくさん殴られた。

そうして今度は冷たいお風呂の中に漬けられて、気がついたら違う場所にいた。

新しい場所は箱の中ではなく、エサを投げられることもなかった。人間みたいだと思った。

わたしはそこで初めて、わたしには「風花」という名前があるのだと教えてもらった。

「ここは安全だよ。」と優しくそんなおばさんが教えてくれたけど、ママがいないので寂しくなった。

「風花」という人間になってからしばらく、わたしはシセツというところで暮らした。

そこにはたくさん人間の子供がいて、わたしと同じように体が傷だらけの子供もいた。

背中にたくさんタバコの跡をつけた男の子は、

「早くママが来てくれるといいな。」と笑って言った。わたしもママに会いたいと思った。

私が「しょうがつこう」に入る時、ママが迎えに来てくれた。やっとママと一緒に暮らせる。

シセツの人も、おめでとうと言ってくれた。

わたしのすごく素敵な日。

おうちに帰って、やっぱりいつもお腹の空く日ばかりだったけど、ママと暮らせるから、わたしはしあわせ。

ママはよく怖い顔で、ホウキの柄でわたしを殴ったりするけれど、「パチンコ」というものがうまくいった時なんかは、

わたしにお菓子をくれたりする。

優しくしてもらえると、わたしはすごく嬉しい。
もったいい子にしなきゃと思う。
ママが怒らなくてもいいように、いい子にならなきゃ。

小学校はつまらないところだった。

勉強はよくわからないし、男の子たちが、わたしのことをくさいと言う。

洋服が汚れているのがいけないらしいので、

小学校のせっけんで洗ってみた。

乾かすところがなくて、濡れた服を着たまま帰ったら、
家に入れてもらえなかった。

その時は冬だったから、とても寒くて、
冬に洗濯はやめようと思った。

小学校はきらいだけど、給食は好き。

給食を食べた時だけ、お腹がいっぱいになって、すごく幸せになれる。

だから給食がない日は、泣きたくなるほど悲しい。

あんまり給食がおいしいので、みんなのパンの残りを集めて
こっそり持って帰って、ママにプレゼントしてみたら、
みつともないと殴られた。

わたしはママの喜ぶことが上手にできない。

もっともっと、いい子にならなければ。

わたしがいつもお腹を空かせているから、時々近所のおばさんが、
ごはんをわけてくれる。

おばさんの作ってくれるごはんは、給食よりずっとおいしい。

何度目かのごはんをもらった時、そのうちのおじさんが、

「野良猫にエサをやるようなマネをするな。」とおばさんを怒鳴っていた。

わたしが来ることで、優しいおばさんが悲しい思いをするのはいいだ。

小学校から帰る時、わざとその家の前は通らないようにした。

学校からの帰り道の公園で、「猫にエサをやらなくてください」と書いてある張り紙を見た。

日向ぼっこをしているおばあちゃんに、「どうして？」と聞いてみた。

「責任持つて面倒を見るつもりがないなら、エサをあげるのは無責任だってことだよ。」

「エサをやるなら、ちゃんと飼いなさいってこと？」

「まあ、そうだね。」

飼ってもらえないからノラなのに、ごはんももらえなかったら、悲しくなると思う。

「ノラネコはどうしていけないの？」

「迷惑だからだよ。」

いるだけで迷惑だなんて、ノラネコはなんてかわいそうなんだろう。

公園の隅に、白い小さな子猫がいた。

病気なのか、目にたくさん目やにがたまっている。

やせて力のない猫。

私は何もあげられない。

「ごめんね。」

帰るところのない、かわいそうな猫。

私はちゃんと、おうちがあるんだ。

ごめん。ごめんね。

家に帰ると、いきなり殴られた。

夏休み前で給食がなかったので、あんまりお腹が空いて、ママのお菓子を食べたのがばれたのだ。

「ごめんなさい。」

涙が出そうだったけど、ぐっと我慢する。

泣くともっと、怒られてしまうから。

一生懸命謝ったけど、家の外に出されてしまった。

外は雨が降り始めていたけど、冬じゃないから寒くない。
はだして道を歩きながら、寒くなくてよかったと思った。

公園の隅にいた猫は、雨に打たれたまま動かなくなっていた。
名前もなく死んでいった猫。

せめて名前くらい、つけてあげたい。

風花というのは、雪の名前だとシセツの人が言っていた。
晴れた空に降る雪の名前。

誰がつけたのかわからないけど、すごくきれいな名前だと思う。
わたしは冬に生まれたんだろうか？

きれいな名前をつけてくれたのが、ママだったらいいな。
猫には風花の一字をとって、ハナちゃんつけてあげた。

ばいばい、ハナちゃん。

次に生まれてくる時は、やさしい飼い主が見つかるといいね。

夏休みのある夜に、ママが花火を見に連れてってくれると言った。

すごく嬉しい。

町内会館の張り紙で、花火の日は明日だって知ってたけど、
ママと一緒にあでかけてくれるから、そのことは言わないことに
した。

近所で一番高いマンションの、螺旋階段に立った時、
ママはしばらく黙ったままだった。

「ママ、ここで花火見るの？」

「高いからね。よく見えるよ。」

「誰も来てないよ?」

「一番よく見える秘密の場所だから。もうすぐ花火が始まるよ。」

ママは私を抱きかかえ、階段の手すりに乗せた。下から風が吹き上げる。

車がミニカーみたいに小さく見えた。

「ママ、風花のこと好き?」

ママは何も答えてくれなかった。

「風花はママのことが大好きだよ。」

晴れた日に降る雪は、積もることなく消えてしまっの? 夏なのに、雪が降っているように見えた。

きらきら光る、きれいな雪。

「ママのことが、一番好き。」

でも喜ぶことが上手にできなくてごめんね。

ママがくれた、風花のいのち。

ママが大好きだから、返してあげる。

ママは喜んでくれるだろうか?

わたしはゆつくりと、自分から前に乗り出した。空を飛んで、空に還る。

ママ、大好きだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7880a/>

風に散る花

2011年1月22日14時30分発行